

産業革命とロバート・オウエン (一)

——性格形成論と『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』——

亀 山 潔

目 次

- 一 はじめに
- 二 性格形成論
- 三 生産力の把握
- 四 『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』

一 はじめに

ロバート・オウエン Robert Owen は、一七七一一年に生まれ、一八五八年、八七歳の長い多彩な一生を終えた。^① 八七年といつかれの全生存期間は、ちょうどイギリスにおける産業革命という激動の全期間にわたっている。

産業革命とロバート・オウエン (一)

一七八一年、かれが一〇歳のとき、ロンドンへ出て呉服商の店員となつてから、一七九八年、デイビッド・デイルからニュー・ラナーク工場を譲り受けるを通じて、イギリスにおける綿紡績工業および綿織物工業は、飛躍的に発展した^③。しかも、イギリス産業革命の指導部門は、この「新興の綿工業」部門なのである。そして「綿工業は、たんに、イギリス産業資本確立の指導部門であつたばかりでなく、世界資本主義の形成を促進する指導的役割を果たした」のである。オウエンは、このように、イギリス産業革命の花形産業である綿紡績工場を経営して成功し、まさに「産業革命の子」^⑤といわれるのにふさわしいものであつた。

ところで、「産業革命は機械の出現によつて始まる」^⑥。機械の出現は、イギリスにおいては、一八世紀なかばごろからであるが、これが採用された部門が前述の綿工業部門なのである。産業革命は、このように機械化という現象を伴うのであるが、機械が発明されたから産業革命が生じたわけではない。むしろ逆に、機械化が必要とされたために、機械が発明されたのである。それではいったい、機械化を必要とした経済的必然性は何なのか。^⑦

産業革命前のイギリスは、「資本の本源の蓄積」^⑧が全面的に行なわれた時期であつて、そのためのさまざまな政策は、いわゆる重商主義政策であるといえる。ドブによると、「重商主義とは、貿易による搾取を国家が統制して行なう体制であつて、資本主義的工業の青年期にとつて、きわめて重要な役割を果たし、本質的には資本の本源の蓄積時代の政策であつた」^⑨。つまり、産業革命期前のイギリスにおける製造業は、かなりの程度発展しているとはいへ、外国貿易すなわち商業資本に依存せざるをえない、いわば「初期的な資本」によるものであつた。したがつて、産業革命前の重商主義政策は、初期資本のために、「財貨の集中」と「労働力の形成」＝資本・賃労働関係の創出を必要としたのである。^⑩

初期資本の利潤源には二つある。一つは流通過程からの譲渡利潤と、他の一つは、製造業の生産過程からの剰余価値である。初期資本の利潤源は、この二つの相異なる要因が複雑にからみ合っているわけである。ここで問題になるのは、剰余価値Ⅱ製造業の生産過程からの利潤源である。初期資本Ⅱ重商主義段階における剰余価値は、手工業的技術を基礎とし、そこには技術革新による利潤源Ⅱ相対的剰余価値の獲得とは、本質的に異なるものである。したがって、この場合には、生産性の上昇はなく、剰余価値の生産はもっぱら低賃金・長時間労働による絶対的剰余価値の獲得である。^⑪この時期において、低賃金を可能にしたのは、労働者の賃金外収入（零細地の所有、共同地の利用、手工業用具の所有による収入）によるものであった。つまり、賃金がいちじるしく低くても、労働者は、別のところから賃金を得たり、あるいは、生存に必要な消費物資を調達し、生計をたてていくことができたわけである。

ところが、初期資本の一般的蓄積が進行し、企業規模の一般的拡大が行なわれるが、このことは、技術革新を行なわないとすれば、企業規模拡大の程度とまったく比例して、労働者数をふやさなければならぬ。潜在的な労働者としては、多数の貧民がいた。かれらに雇用を与え、自立できるよう救済しようとする提案が、一七世紀なかば以降数多く出されたのもこのためである。しかしながら、貧民は、何ら技術をもたず、雇用されて一定時間拘束されて、規則的に働くという習慣さえ身につけていなかったのである。したがって、初期資本のもとでの企業規模の拡大は、労働者の不足という事態を生じさせることになる。こうして、イギリスの一八世紀二〇—三〇年代には、労働力の需要増大↓熟練労働者不足の關係により、労働賃金は上昇しはじめた。このことは、初期資本による絶対的剰余価値の獲得をいちじるしく困難にするか、あるいは不可能にした。^⑫このため、イギリスの製造品とくに毛織物製品の価格は騰貴し、後進国とくにフランスとの競争において不利な立場にたたされた。この不利な条件を克服するために、賃金の

抑制、植民地政策による外国市場の開拓、保護政策などを採用したが、いずれも決定的な対策とはなりえず、結局、アダム・スミス流の転換、すなわち国内市場を重視する「高賃金経済」体制への転換を余儀なくされたのである。

スミスの重商主義批判は、以上の経済状況のなかで行なわれたものであって、じつに時宜を得たものであった。スミスは、高賃金を認め、国内市場を重視し、そのかわり、生産性の向上を、と強調する。これがスミスの中心的課題といわれる「分業論」となってあらわれ、まさに相対的剰余価値獲得の方法を提示したものととして、その技術的方法ではなく、その根底にある考え方に注目されたわけである。一八世紀なかば以後の現実の経済は、急速に機械が採用されはじめ、重商主義体制下の初期資本は、自己の存続をはかるため、初期資本の範疇から脱し、みずから産業資本に転化していく運動（機械化による生産性向上）にきそって加わることになる。したがって、この時期において、生産力をもっとも積極的に把握することができた階級は、このように産業資本に転化するような、いわゆるブルジョアジーなのであった。イギリス産業革命は、以上のような経済的必然性として、自生的に行なわれたのであり、生産力の上昇を実現させたのである。産業革命の指導部門がとくに多くの人手を要する繊維工場部門であったという事実は、以上のことをよく示している。^⑮

ロバート・オウエンは、一七九一年、一九歳にして五〇〇人の労働者を擁する最新の綿紡績工場を管理する立場にあり、一八〇〇年には「一家を構えて村に居住している約一三〇〇人と、教区からえた四〇〇〇から五〇〇〇名の貧しい子供たちとから成り立っていたニュー・ラナーク工場の「統治者」であった事実を知るとき、オウエンの思想家としての位置は、おのずから明らかとなるう。

イギリスの綿工業の飛躍的發展は、原料としての綿花の輸入を激増させた。一七八〇—一七八二年の綿花輸入量を

一〇〇とすれば、一七九一—一八〇一年のそれは、六五五であり、一八二九—一八三一年には三一五二、実数にして二億四九〇〇万重量ポンドであつて、わずか五〇年たらずのあいだに、綿花の輸入量は、三一・五倍に増加したのである。^⑦これだけ多くの輸入綿花が、イギリス国内の工場で加工されたわけであるが、このなかにじつにオウエンのニュー・ラーク工場で紡績された分が含まれているわけである。しかも、オウエンは、すでに一八世紀末に、マンチエスターでかなり細い糸を紡績することに成功していた。かれ自身こうのべている。「この工場の管理を始めてから一年ばかりで「一七九二年に当たる」、私は千差万別な綿の質についての知識を増し、使っている機械の精確さ、原料が仕上がった糸につくられるために、必ずとおらなければならぬ全工程の正確さを改良して、仕上げ糸の細さを一二〇番手から三〇〇番手までたかめる方法を案出し、……私のつくった糸のすぐれたことは、その糸がかの価格表の値段の五〇パーセント増を造作なくえられた」^⑧と。細い糸を紡績するには、相当の機械装置を必要としたのであるが、番手のたかい細糸を製造すれば、それだけ利潤を上げられたというのは事実である。有名な細糸紡績業者マッコンネル商会の例では、「一二〇番手以下のばあい損失」を蒙っているが、「一四〇番手以上については、概して番手数がたかくなるほど、ポンド当りの利潤が増大してゆく傾向」^⑨にあることが知られる。このことから、オウエンの工場の質的水準はいかに高いものであつたかがわかる。機械の採用により、質量ともに圧倒的優位に立つたイギリス綿製品は、外国との競争において容易に勝利をおさめることができ、イギリス綿製品は、世界のほとんどあらゆる国ぐに輸出された。こうして、産業革命前の重商主義段階における国際的に不利な条件は克服され、初期資本の存在それ自体を無意味なものにした。

しかしながら、機械の採用は他方では社会問題を発生させた。機械は、熟練労働者を不要にする。織布の材料とし

ての織糸が過剰であったときは、手織工の黄金時代であったが、一八〇一年、エドモンド・カートライトによる力織機（蒸気機関の利用による自動装置）が発明され、これが実用化されるやいなや熟練労働者は追放され、追放されなかったものでも、かれらの賃金はいちじるしく悪化した。早くも一八一六年には、手織工の賃金は一般の工場労働者の賃金よりも低くさえた。したがって手織工の数も、一八三〇年以後は漸減している（表参照）。このような事態に対する手織工の抵抗は「機械を破壊すること」であった。これがラダイト運動である。この運動が一八一―一八二二年および一八一六年に、綿工業のメッカであるマンチェスターを中心に行なわれたことは象徴的である。

機械の採用は、熟練労働者を不要にただけではない。賃金の低い婦人・幼少年工が工場で働くことを可能にした

年	工場労働者		手 織 工	
	数 1,000人	週賃金 ペンス	数 1,000人	週賃金 ペンス
1814	110	126	216	222
15	114	126	220	162
16	117	126	224	123
17	121	125	228	105
18	123	124	232	99
19	125	124	236	99
20	126	124	240	99
21	129	123	240	99
22	132	123	240	99
23	135	118	240	99
24	167	118	240	99
25	173	118	240	99
30	185	115	240	75
35	220	116	188	75
40	262	112	123	75

注. 吉岡昭彦『イギリス資本主義の確立』

69ページ。

反面、成人・男子の労働者が不要とされた。この状態が、いかにひどいものであったかは、エンゲルスが詳細に生々しく描写している。²²⁾ オウエンは、このような悲惨な労働者、とくに幼少年工労働者を救済し、心身ともに健康な人間らしい生活をする事ができるように、その施策を考えたのである。

産業革命は、要するに絶対的剰余価値の獲得に依存する初期資本の重商主義体制から、相対的剰余価値を獲得する資本主義体制への転換期であった。したがって、産業革命の進行中にあつては、明確な形で無産労働者階級Ⅱプロレタリアートは形成されていなかったのである。オウエンをとりまく周囲の状況は、このように産業資本の確立過程であり、かつ近代的労働者階級の形成過程、すなわち、資本の本源の蓄積の終了過程でもあったわけである。オウエンのおかれていた位置は、まさに以上のような経済的社会的状況であつたのである。

さて、オウエンの思想は、さまざまな側面をもっている。オウエン研究の権威者コールによれば、オウエンは「工場の改革者、教育者、社会主義者、協同組合の先駆者、労働組合の指導者、非宗教的教育論者、理想社会の建設者、実践的事業家であり、当時にとつても何かなぞのようであつたし、後世にとつてもなぞでないわけではない」。²³⁾ オウエンは、コールの指摘をまつまでもなく、多面的な性格をもっているわけであり、したがってオウエンに坎んする研究も多岐にわたっている。わが国においても、この研究はおびただしいものである。これの整理については、すぐれたものがあるのでそれに譲り、本稿ではオウエンの精神的能力のもつとも盛んであつたといわれる一八二二年から一八二〇年にかけての主要著作を中心に、オウエンが当時の生産力をいかに把握していたかを検討することにする。

一八二二年から一八二〇年の期間は、五島茂氏によるオウエンの段階区分からすれば、第一期から第二期のなかばまでにいたる時期に相当する。²⁴⁾ このちょうど中間に一八一七年という年がある。この年を、マックス・ベアはオウ

エンの転換の年であるという。ベアはこのべている。「オウエンは、明らかに労働者のあいだに起こりつつあった動揺や騒擾についての注意深い観察者であった。動揺や騒擾からあつめた知識が、かれの改革的活動を促進したのである。かれは、人類を貧困から解放するための伝道的経歴へ、しだいにはいつていった。その使命の重大さが心にひらめいたとき、まさに恍惚境の瞬間であつたにちがいない。そうなるための諸要素は、徐々に集められていたのであつて、一八一七年、ついにその諸要素が合体して一つになったのである。いまやニュー・ラナークの機敏な紡績業者は、社会主義者として生まれかわつたのである」⁽²⁷⁾と。

マックス・ベアのように、一八一七年にオウエンが転換したことを強調することにより、オウエンの社会主義者としての側面を前面におし出すことになる。これにたいして、ガットレルによる最近の研究では、オウエンを保守主義者として捉えようとしている。ガットレルはいう。「もし、かれ「オウエン」が社会主義者の伝統の先駆者であると考えられなければならないとすれば、かれは特殊な型の保守主義の父であると思なされる十分な、否、より十分な資格をもっている。事実、かれの保守主義は、かれの経歴のうちで、もっともいちじるしい特色のうちにある」⁽²⁸⁾と。さらにガットレルは、オウエンを合理主義者である一方、トリーリイ的傾向のあることを指摘し、オウエンは「哲学者としては、単に、啓蒙思想最後の偉大な普及者である。これと対象的に、かれの保守主義は、何か新しいものがある。それは「保守主義の」終りを示すものではなく、始まりを示すものである」⁽²⁹⁾とこのべている。ガットレルは、このようなオウエン解釈を行ない、一八一七年の転換を認めるというよりはむしろ、その思想的連続性を強調している。「直接的ではないけれども、『新社会観』の前提が、オウエンを『ラナーク州への報告』のなかで、社会主義者の伝統において明確な最初の声明へと導かせたようである」⁽³⁰⁾と。

以上、マックス・ベアの伝統的なオウエン解釈と、最近のガットレルの見解という対象的なものを見てきたが、両者ともオウエンの農業論については一致している。これについて、両者は、古い共同体を回顧するという反動的なものとみるか、あるいは重要なものではないという。ガットレルは、「人びとのあいだの適切な関係は、農村イギリスにおいて目的を達するとオウエンは信じ、そこに示された相互依存と相互恩恵を、ニュー・ラナークの工業村落^{インダストリアル・ヴレッジ}のなかで、絶えず再組織しようと試みた^{③①}」と。ベアはもっと端的にこういう。『ラナーク州への報告』は「そのなかで、かれは自分の共產主義的教義と貨幣改革案とを詳細にのべている」が、しかし、この著作は「取るに足らぬ提案の一つ——従来の馬による犁^{プラウ}の耕作をやめて、人力による鋤^{スード}で耕作しようとする提案——を取り扱っているのだが、これはオウエン主義の理解のうえからもけつして重要なものではない^{③②}」と。

オウエンの農業論については、後論のとおりであるが、はたしてベアやガットレルの主張するように古い共同体を回顧するもの、あるいは人力による鋤の耕作は、まったく考慮に値いしないものなのだろうか。この問題については、一八一七年に出された最初のオウエンの機関誌『真理^{ミラー・オブ・トゥルース}の鏡^{③③}』のなかに、かなり詳細な農業論が展開されている。また、当時の鋤耕作によりさまざまな実験を試みていた種苗栽培・販売業者ウィリアム・フォラのオウエンへの手紙（一八二〇年十一月一三日付）に鋤耕作についての詳細な考察が展開されている。本稿の後半でこれらに基づき、オウエンの農業論を再検討しようとするものである。（この問題については、紙面のつごうにより別号に掲載する。）

なお、本稿では、オウエンの農業論に先だって、『新社会観』の内容となっているオウエンの『性格形成論』の特徴と性格および意図を検討し、さらに、『新社会観』の第一、第二論文を執筆していた一八一二年（この公刊は一八一三年）^{③④}に、『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』と題する、オウエンが書いた最初のパンフレットに接することがで

きた(本稿四の注①)ので、これらの文献をとおして、オウエンのブルジョア性を検討しようとするものである。(本稿の後半部分については、紙面のついでに別号に掲載せざるをえなかった。このため、本号掲載分の副題を表記のとおりとした。)

注

- ① The Life of Robert Owen written by himself, 1857, Vol. I, Reprints by Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1967, p. 1. 五島茂訳『オウエン自叙伝』(岩波文庫 一九六二年)一三ページ。オウエンは五月一四日北ウォールズ・モントゴメリーシャー・ニュータウンで生まれ、六月一二日に洗礼を受けた。かれの父は同名のロバート・オウエンで、家具商兼金物商であった。さらに駅通長もやり、教区の仕事も行なっていた。母はニュータウン近在きつての豪農にかぞえられる大家ウィリアム家の長女で、評判の美人であつたらしい(Ibid, p. 1. 邦訳一三ページ)。
- ② David Dale は一七三九年生まれ。スコットランドのニュー・ラナークで紡績工場を經營していた。デイヴィッド・デイルの長女アン・カロライン・デイルが、一七九九年オウエンと結婚した。オウエンは、女性にたいしては内気であつたらしく、デイル嬢とたびたび会つていても、なかなか求婚できないでいたらしい。オウエン自身こう述懐している。「私はまだうぶで、婦人と近づきになるのをしり込みしがちであつた」(Ibid, p. 47. 邦訳九三ページ)。
- ③ 琴野孝「イギリス綿織業における工場制への移行過程」(『社会経済史学』第三八巻第四号、一九七二年一〇月)参照。Cf. Robin M. Reeve, *The Industrial Revolution 1750-1850*, University of London Press, 1971, pp. 21-27.
- ④ 角山栄「イギリス産業革命」(岩波講座『世界歴史』18、一九七〇年)一五九ページ。
- ⑤ 白井厚『オウエン』(牧書店、一九六五年)一ページ。
- ⑥ 角山「前掲論文」一五六ページ。
- ⑦ 拙稿「産業革命と空想的社会主義——オウエンとサンシモンの生産力把握——」(田村秀夫編『市民社会批判の承譜』中大出版、一九七三年)三〇—三二ページ参照。
- ⑧ 拙稿「イギリス重商主義におけるインダストリ」(『政経論叢』第一三号、一九七〇年一月)一八三ページ。
- ⑨ Maurice Dobb, *Studies in the Development of Capitalism*, Routledge & Kegan Paul, 1946, p. 209. 京大近代史研

究会訳『資本主義発展の研究Ⅰ』（岩波書店、一九五四年）三〇〇ページ。

⑩ 拙稿「イギリス重商主義におけるインダストリ」一八三ページ。

⑪ 角山栄『イギリス毛織物工業史論』（ミネルヴァ書房、一九六〇年）二六〇—二六一ページ。林達『産業革命への道』（中大出版、一九七一年）五四ページ参照。

⑫ 拙稿「イギリス重商主義と貧民——一七世紀イギリスにおける貧民雇用の諸提案を中心として——」（『政経論叢』第一五号、一九七一年一月）二七—二八ページ参照。

⑬ 林『前掲書』五八ページ参照。

⑭ Cf. Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, with an introduction by Edwin R. A. Seligman, Everyman's Library, Book I, IV. 竹内謙二訳『国富論』（東大出版会、一九六九年）第一編、第四編参照。

⑮ イギリス産業革命は、繊維工業部門だけでなく、鉄工業、鉱山業、交通・通信関係部門、農業など、あらゆる分野において技術革新をもたらした。資本主義の確立を実現させた。Cf. T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760-1830*, Oxford University Press, 1948, Chap. III. 中川敬一郎訳『産業革命』（岩波書店、一九五三年）第三章参照。

⑯ *The Life of Robert Owen*, pp. 27-28, 60, 邦訳五九—六〇、一一六ページ。なお、オウエンは、自分で「細糸（二〇番手から三〇番手以上までの糸）の最初の紡績業者であった」（*Ibid.*, p. 112, 邦訳二〇六ページ）と述べている。

⑰ 角山「前掲論文」一五八ページ。

⑱ *The Life of Robert Owen*, p. 34, 邦訳七一ページ。〔 〕内は引用者。

⑲ 吉岡昭彦『イギリス資本主義の確立』（御茶の水書房、一九六八年）五一ページ。

⑳ イギリスで綿糸が過剰になったとき、フランスの工業は危機に直面した。「アミアンの平和」（一八〇二年）前後は、「イギリスとフランスの産業の成長と市場拡大とをめぐる競争のただ中にあった」（吉田静一『フランス重商主義論』未来社、一九六二年、一四四ページ）。

㉑ 武居良明『産業革命と小経営の終焉』（未来社、一九七一年）九四—九五ページ。なお、毛織物工業部門におけるラダイト運動
産業革命とロバート・オウエン（一）

動については、武居良明「一九世紀イギリスにおける機械破壊運動——北部毛織物工業地帯の場合——」(『社会経済史学』第三八巻第六号、一九七三年二月)参照。

- ②② 竹内謙二訳『英国労働者階級の状態』上・下(慶友社、一九二六年)。「マルクス・エンゲルス全集」第二巻(大月書店、一九六〇年)二二三ページ以下参照。

- ②③ Robert Owen, *A New View of Society and Other Writings*, introduction by G. D. H. Cole, Everyman's Library, New York, 1927, introduction, p. vii.

- ②④ 土方直史「日本におけるロバート・オウエン研究史——空想的性格の理解を中心として——」(『経済学論叢』第一〇巻第三・四合併号、大淵彰三博士古稀記念論文集、一九六九年七月)参照。氏は、オウエンを、「実行的社会主義」、「階級協調的」共同組合主義者」、「プロレタリア」、「ブルジョア」の四グループに分けて、従来の研究を整理している。

- ②⑤ Max Beer, *A History of British Socialism, with an introduction by R. H. Tawney*, 1919, Reprints in two Volumes in 1953, Unwin Brothers, Vol. I, p. 180. 大島清訳『イギリス社会主義史Ⅰ』(岩波文庫、一九七二年)三六ページ。引用文は必ずしもこの訳文によらないばあいがある。以下同じ。

- ②⑥ 五島茂氏『ロバート・オウエン著作史』(大阪商科大学経済研究会、一九三三年)序Vページ。氏によるオウエンの段階区分は次のとおりである。

第一期 オウエニズムの生成(一七七一—一八一四年)

第二期 オウエニズムの展開(一八一四—一八二四年)

第三期 空想的コミニズムの展開(一八二五—一八二八年)

第四期 無産階級オウエニズム(一八二九—一八三四年九月)

- ②⑦ 第五期 オウエニズムの方向転換(退却と抽象的爛熟)(一八三四年一〇月—一八五八年)

- ②⑧ M. Beer, op. cit., p. 165. 邦訳一五ページ。

- ②⑨ *A New View of Society and Report to the County of Lanark by Robert Owen*, Edited with an introduction by V. A. C. Gatrell, Penguin Books, 1970, introduction, p. 15. []内引用者。

²⁹ Ibid., pp. 17-18.

³⁰ Ibid., p. 13.

³¹ Ibid., p. 20, cf. ibid., p. 43.

³² M. Beer, op. cit., p. 174. 邦訳二八ページ。

³³ “The Mirror of Truth”の内容については、すでに、拙稿「産業革命と空想的社会主義」(前掲論文四六―四九ページ)において一部紹介したので参照されたい。なお、本稿三の注⑥参照。

³⁴ 五島茂『前掲書』一八―二三ページ参照。

二 性格形成論

オウエンの性格形成論は、かれの初期の主要著作『新社会観』の中心的思想ともいべきものである。これは四つの論文からなり、第一、第二論文は一八二二年に書かれ、一八一三年に公刊された。第三、第四論文は一八一三年に書かれ、一八一四年に公刊されたと考えられている。^①しかし、『新社会観』“A New View of Society”と題し、第一論文から第四論文までを、通しのページにした「真の意味の出版は一八一六年とみるべきである」^②とされている。ところで、第一論文は、「性格形成論」と題するものであり、題名の直後にこう書かれている。「適当な手段を用いれば、どんな一般的性格でも、最善のものから最悪のものまで、もっとも無知なものからもっとも啓発されたものになるまで、どんな社会にも、広く世界にでも、付与することができる。しかもその手段は、大部分、世事に影響力をもっている人たちの意中にあり、かつ支配下にある」^③と。第二論文は「前論文諸原理の続論と実施への部分的適用」

と題するもので、冒頭にこう書かれている。「第一論文においては、一般的原理をのべるにとどめた。本論文では、それら諸原理を實際に応用することから得られる諸利益を示し、また、この実行が何の不都合もなしに一般的にとりいれられる方法を説明する」としている。^④

第三論文は、「前論文諸原理の特殊な状態への適用」と題し、こう書かれている。「真理は究極的には必ずや誤謬に打ち勝つに違いない」と。^⑤この論文では、ニュー・ラナークにおける教育問題をとり上げている。最後の第四論文は、「前論文諸原理の政治への適用」と題し、こう書かれている。「犯罪を予防することは、それを処罰するよりも比較にならぬほど優れている」。「無知およびその結果として生ずる犯罪を予防する統治制度は、無知を奨励することによって犯罪の必然性をつくり出し、その後両者に刑罰を課する統治制度よりも無限にまさっている」と。^⑥ここでは、結局、ベンサム流の功利論、「最大多数の最大幸福」論に基づきつつ、性格形成論による政治的施策の問題がとり上げられている。「最善の政治は、支配者とこれに服従する人びとを含めて、最大多数の最大幸福を實際に生み出す政治である」とオウエンはのべている。^⑧

以上『新社会観』における四論文の問題提起を概観した。この問題意識のさらに背後にあるものは何か。それは前述のとおり、産業革命の結果としての社会問題、とくに婦人・幼少年工にたいする悲惨なまでの酷使という現実をふまえてのものであった。一九世紀初頭におけるイギリスは、産業革命の進行中という激動のさなかにあり、生産力は飛躍的に上昇しつつあった。オウエン自身のニュー・ラナーク工場は、その尖端にあったのである。しかしながら、イギリス人口の約四分の三に相当する一五〇〇万人の貧民労働者階級は、「ひどい悪徳と悲惨」の状態におかれ、「かれらはいま、犯罪をおかすように仕込まれ」ている事態におかれていると、オウエンは嘆いている。^⑨

生産力の無限の上昇を約したはずの機械は、人間を飢餓と過労におとし入れ、さらに婦人・幼少年工の健康をいぢるしく害する元兇とさえなったのである。このような劣悪な「環境」におかれている貧民労働者は、知識ある、有徳で幸福な人間となりうるはずはなかった。オウエンがもっとも憂慮したのは、このような貧民労働者の存在そのものであった。しかしながら、オウエンが、それを憂慮した理由は、それだけではない。オウエンは次のようにのべている。「自分の仕事をやり出してみると、恐るべき障害にみちみちているのが直ちにわかった。……この人びと「ニュー・ラナーク工場の労働者」は、悪い状態に囲まれていて、これら悪い状態はかれらのうえに力強く働きかけ、かれらの性格や行為をゆがめていた」と。^⑩つまり、オウエンは、自分の仕事、綿紡績工場の経営・管理上の障害の一つとして、質の低い、徳の低い労働者をあげている。この労働者は、「どこからでも誘いさえすれば、手早くかき集められてきた人びとであって、その大多数が、怠惰で、のんだくれで、嘘つきで、誠意なく、しかも偽信心家であった」という。オウエンはさらにいう。「工場全体の改造が自分の見解にとつても、商売の金銭的成功の上からも必要だとは、すぐわかった」と。^⑪

この工場全体の改造の最大部分は、もちろん貧困をきわめている労働者、怠惰で、のんだくれの、嘘つきの労働者を、いかにして規則正しく勤勉に働く人間、すなわち陶冶された労働者に教育（訓練）するかということであった。しかも、「ニュー・ラナークで直面した「工場の」管理問題、とくに労働の問題は工業国イギリスにおける初期の世代の企業家すべてにとって、共通の問題であった」^⑫わけであり、オウエンだけの問題ではなかった。それにもかかわらず、オウエン以外の大部分の工場経営者たちが、これらの問題をオウエンのように鋭く感じとらなかつたのはどうしてか、という問題が残される。もっとも、オウエンに影響を与えたと思われるジョセフ・ランカスターのような大

衆教育を主張する論者もいなかったわけではないし、ベンサムのような著名人の多くがオウエンに賛同しなかったわけではない。^⑭一八二二年、「二人で一〇〇〇人の児童を教化しようという新考案の経済的な一計画に基づいた貧民教育への偉大なる友として、かれ「ランカスター」をスコットランドに紹介する公開大宴会が開かれた」。^⑮オウエンは、この大宴会で司会をつとめ、はじめて性格形成論の概要を公式の席上で明らかにするはめとなった。オウエンはこの大宴会が開かれた目的について「誤った不適切な教育をうけている人びとにたいして、正しい適切な教育を与える運動を促進することにある」^⑯とのべている。かれの性格形成論の意図は、陶冶された労働者を養成することにあった。

ところで、オウエンは、自分の考えていた性格形成論には、大変な自信をもっていた。それは、「二〇年以上にわたる広い経験から生じたもので、この期間に、それらの真理と重要さとは、種々の実験によって証明されたものである」^⑰からであった。このオウエンの考えは、かれがかつてマンチェスターのマックガッフオグの店員をしていた一二—一三歳のころから抱いていたというが、具体的には、自分が管理し、「統治」したニュー・ラナーク工場での経験と実験により自信を深めたものであるというほうが正確であろう。「わたくしの一生のこの時期（一八一〇年から一八一五年まで）までに、わたくしの「性格形成にかんする諸論」四編と、わたくしのニュー・ラナークでの実践とは、わたくしをその時代の指導的な人びとのあいだに有名にした」^⑱とオウエンはみずからのべているほどである。

ここでいうオウエンのニュー・ラナークでの実践というのは、子供たちは、「悪い状態に囲まれていた」ため、「施設の許すかぎり多くの子供たちを、そうした悪い状態から引き抜いてきて、その気質や慣習をかたちづくるのに、より良い状態におきたいということであった。この「目的のために、一つの建物を完成しようとするれば、最初から五〇〇ポンドほどの費用がかかり、その後も年々の支出がかなりのものになると思われた」が、「これは子供たちの改

善される性格と、親たちの改善される健康とによって、十分償なえると思った」^⑮と、『自叙伝』のなかで述懐しており、実際にニュー・ラナーク工場でこれを実行し、成功をおさめているので、オウエンの自信には、なみなみならぬものがあつたようである。この計画が、『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』に具体的に示されている。

こうして「オウエンの主要な目的は、教育であると、最後まで主張しつづけた」^⑯と、コールによって指摘されることになるのである。コールによれば、「良い市民を形成するためには、男たちや女たちを教育する以外に方法はなく」、「かれらのすぐれた人間性がのびされるよう奨励され、心身ともによく配慮され、正しい生活の習慣と方法を訓練されるような環境を与える以外には、かれらを良い市民にするための教育方法はありえない」^⑰とオウエンは考えた。

注

① 五島茂『前掲書』二二—二三ページ。しかし、本人の『自叙伝』には、「その初めの二編は、一八一二年に、後の二編は一八一三年初めに出版された」(The Life of Robert Owen, p. 94, 邦訳一七四ページ)としているが、五島氏はオウエンのこの記述は必ずしも信頼できないとしておられる。

② 『同書』二三ページ。

③ Robert Owen, A New View of Society and Other Writings, Introduction by G. D. H. Cole, Everyman's Library, New York, 1927, p. 14. 以下 A New View of Society の引用はこの版による。N. V. S. は略記する。楊井克巳訳『新社会観』(岩波文庫、一九五四年)二五ページ。引用訳文は、必ずしもこの訳文によらない。以下同じ。

④ Ibid., p. 22. 邦訳三九ページ。

⑤ Ibid., p. 39. 邦訳六六ページ。

⑥ Ibid., p. 63. 邦訳一〇四ページ。

⑦ Bentham はニュー・ラナーク工場の出資者の一人であつた(The Life of Robert Owen, p. 129. 邦訳二三三ページ)。

産業革命とロバート・オウエン」]

- ⑧ N. V. S., p. 63. 邦訳一〇四ページ。
- ⑨ Ibid, p. 14. 邦訳二五二一六ページ。
- ⑩ The Life of Robert Owen, p. 57. 邦訳一一〇ページ。〔 〕内は引用者。
- ⑪ Ibid, p. 57. 邦訳一一〇一一ページ。
- ⑫ Ibid, p. 57. 邦訳一一一ページ。
- ⑬ A New View of Society or Essays on the Formation of the Human Character by Robert Owen, 1816, with an Introduction by John Saville, Augustus M. Kelley Publishers Clifton, 1972, introduction, p. v. サヴィルはつてけつ指摘している。「オウエンは、これらの問題を興味ある感じのきする方法〔＝性格形成論〕で解決した」(Ibid, p. v)と。傍点および〔 〕内引用者。
- ⑭ これに対して、マルサス、ジェイムズ・ミル、リカード、サー・ジェイムズ・マキントッシュなどの経済学者とは、意見を異にしていた(The Life of Robert Owen, p. 103. 邦訳一九一ページ)。
- ⑮ Ibid, p. 106. 邦訳一九六ページ。〔 〕内引用者。
- ⑯ Mr. Owen's Speech, at a public dinner at which he presided, given to Joseph Lancaster at Glasgow in 1812, in the Life of Robert Owen, Vol. I, p. 249. このオウエンの演説は、当時の新聞(紙名は不明)に取り上げられた。これが一八二六年一月二五日付のNew Harmony Gazette, Vol. I, No. 18. に再録されたものである。
- ⑰ N. V. S., p. 15. 邦訳二七ページ。
- ⑱ The Life of Robert Owen, p. 103. 邦訳一九〇ページ。〔 〕内引用者。
- ⑲ Ibid, p. 84. 邦訳一五七ページ。傍点は引用者。
- ⑳ オウエンは、「一八一四年有名な性格形成学院を建てた。この施設は工場で働く子供のための学校、成人のための共同〔娯楽〕室、幼児のための運動場すなわち、幼稚園を含むものであった」(J. Saville, op. cit., introduction, pp. v-vi.)。
- ㉑ G. D. H. Cole, op. cit., introduction, p. x.
- ㉒ Ibid, p. x. もともとこの「良い市民」とは、資本のもとで規則正しく働く労働者を意味する。

三 生産力の把握

実際にオウエンは、二〇〇人以上の労働者を擁するニュー・ラナーク工場およびその周辺の居住地で幼稚園をつくり、その他さまざまな福祉施設を準備した。このような計画の概要は、かれの『自叙伝』のなかからも知ることができるが、『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』（本稿四の注①）において詳細にしかも順序だてて説明されている。『自叙伝』においてこうのべている。「幼児・小児は見えるもの——すなわち、実物——模形や絵——によって、またうちとけた話によって、教えられるかたわら、二歳以上になると、日々ダンスと音楽を教え込まれた」と。これら①の施設を見学するために、多くの人びとがニュー・ラナーク工場を訪れた。「見学者を驚かせたのは、なかでも幼稚園であった」②といわれるほど、かれは幼児教育に力を入れたのである。一八一五年から一八二五年までのあいだに同工場を訪問したものは二万人近かったといわれている。さらにオウエンの労働者にたいする福祉的措置として、次のことは特筆されなければならない。綿花の輸入が、アメリカ政府との関係からおもわしくなくなり、工場を一時操業中止にせざるをえない事態が生じたことがあったが、そのあいだも、「職工はそのままにしておき、ただ機械をきれいにし、いつでも運転できるようにしておくだけで、職工の賃金の全額を引きつづき払った」④のである。ここにもオウエン特有の工場経営における手腕が示されている。

ところで、『新社会観』第一論文の最初に、オウエンは、イギリスには多数の貧民がいることを指摘し、「これらの人びとの性格は、現在、正しい指導や指図を与えられることなしに、そして多くのばあいに、かれらにひどい悪徳と

悲惨の行路を直接しいるような事情のもとで、一般に形成されるままに放任され、かくてかれらは、帝国内でもっとも悪く、もっとも危険な人物となるのである」と、貧民労働者の現状をとらえる。ここで「もっとも悪く、もっとも危険な人物」の部分に注目したい。これは、ラダイトの運動そのものではないにせよ、そのような破壊活動を行なう人物であるとみることが出来る。この第一論文を書いた年が、一八一二年であるとすれば、その同じ年もしくは一年前から、オウエンがかつて事業をしていたマンチェスターで、手織工たちによる機械破壊運動が激烈に行なわれていたことをかれは当然知っていたと見なければならぬ。

機械破壊運動にたいするオウエンの態度は、一八一七年のかれの機関誌『真理の鏡』のなかに表明されている。一八一七年は、マックス・ペアのいうオウエン転換の年であるが、この『真理の鏡』のなかに、“Plain Elucidation of the difficult Parts supposed to exist in Mr. Owen's New View of Society”と題する欄があり、そこで『新社会観』の解説をしつつ、貧困の原因は機械にあることを明らかにしている。「機械の多方面にわたる利用」、「これは、ほとんどのばあい、各事業で手工業労働力にたいする需要を減少させてしまった。これによって、わが国のもっとも有用な市民の少なくとも一〇〇万人を雑草や雄蜂にしてしまった。われわれは、単なる慈悲によって、不生産的な、利益を生まない怠惰者を維持することを余儀なくされている。こうしてただちに貧困を拡大し、大多数の人びとの徳性を破壊しているのである」という。『真理の鏡』では、怠惰な貧民を「雑草」や「雄蜂」にたとえ、社会でまったく役立たないものとしてとらえている。もし、機械が貧困をもたらしすならば、「機械がないほうがよいのだろうか」と、『真理の鏡』において自問し、こうつづけて答えている。「けっしてそんなことはない」と。というのは、機械の使用をやめれば、「機械を採用しているこれらの国民に、いまの利益を放棄させることになるからである」。「これらの国にとっ

ては、世界の各市場でわれわれが安く販売することを可能にする。……それゆえに、この手段〔機械を破壊すること〕は、困難さを増すことになる^⑦』という。一八一七年の前年、一八一六年にも機械破壊運動が激化した。さらに『真理の鏡』には、次のような記事があり、明らかに機械破壊運動にたいする反対表明であるといえる。「民心は扇動されている。すべての人びとは、十分な熟慮と決定のための判断力をもち合わせておらず、したがって騒ぎのうちに終わった集会の結果から大衆によって正しく判断されることはありえない^⑧』と。これは明らかに大衆不信の態度である。これはオウエンが社会変革の主体から大衆を除外したことを示すものである。オウエンはたんに大衆への教育・啓蒙に終始したのであり、その手段は「世事に影響力をもっている人たちの意中にあり、かつ支配下にある」(本稿ニの注^③)のであるから、そこには、ガットレルの指摘したような「啓蒙思想家」としてのオウエン、「保守主義者」としてのオウエン、あるいは「非民主主義者」としてのオウエンという評価が意味をもってくるように思われる。ところで、人びとがこのように扇動されるのは、教育が正しく行なわれていないからだ、かれはこの点においても教育の必要性を主張するのである。「帝国内でもっとも悪く、もっとも危険な人物」は、具体的にこのような騒ぎをおこす人間であることは明らかである。

ところで、オウエンは、第一論文で「不幸な境遇にある第一のものは、労働者階級中の貧民と無教育の不品行者^⑩」であるという。ここで、オウエンによる労働者階級の認識は「貧民」と同義語で、まさに重商主義段階におけるそれとの類似性をもっている^⑪。不幸な境遇にある第二のものは、「残りの人口の大部分であって、かれらはある原理が確実に真理であることを信じ、または少なくともそれを認めながら、それがまったく誤りであるかのように行動するよう教え込まれて^⑫」いる人びとである。このような害悪を放置しておくならば、「それはもっとも悲しむべき結果をも

たらずことになるにちがいない」とオウエンは心配するのである。こうして、教育の重要性と貧困の除去という二つの方策がオウエンによって提唱されることになるのである。この内容が第一論文の主要なテーマである。オウエンにとっては、貧民労働者に「正しい知識を与えることは、かれを幸福にする手段なのである。その根本は、要するに現実の支配階級が人びとに誤った知識を与えているからなのである」とオウエンは考えたのである。こういうところに、オウエンの現体制批判がでてくるのである。

しかしながら、オウエンが現体制を批判したからといって、けっして社会主義的立場からのそれではない。すなわち、オウエンは、第三論文の前に付された「公開状」の冒頭でこうのべている。「わたくしは、諸君と同様に、金銭的利益を得ようとする一製造業者であります」^⑬と。「工場所有者にとり最大の金銭的利益を生み出すようにすることが、わたくしの義務であり、……」とさえいいきっている。そして、「諸君の生命なき機械の状態にたいする適当な配慮が、かかる有益な結果を生じうるとするならば、それよりもはるかにすばらしい構造をもっている諸君の生きた機械にたいして同じ注意を払うことから、同じ結果を期待してはいけないうか」^⑭とのべ、さらに、もっと明確にこうのべている。「諸君は、生ける機械は金銭的利益の増加をもたらしうに容易に訓練指導しうるものである」^⑮と。ここでは、生産手段としての機械と、労働力とを利益のための手段・道具として同一視しているオウエンの態度を知ることができる。

オウエンの現体制批判は、けっして社会主義を指向したものではなく、現実に綿工業を経営し、利益を取得しなければならぬブルジョアジーとしての立場のそれである。この立場からオウエンを解釈するとき、前述の機械にたいするかれの態度も、また、労働者大衆にたいする不信感も、けっして奇異なものではありえない。つまりオウエンは、

明確な形で機械の効用を認識し、機械による生産力を把握しているのである。これは同時に、労働者にたいしても、生産力を向上させる担い手として認識しているのである。つまり「生命ある機械」も「生命なき機械」も、ともに利益の手段であり道具であるかぎり、生産力の担い手であるということになる。しかし、このばあい、労働力は、利潤の「唯一の源泉」と考えられていたわけではない。前述のとおり、産業革命の進行中においても、もともと積極的な形で生産力を把握しえたのは、ブルジョアジーであつたとすれば、イギリス一流の綿紡績工場の経営者であつたオウエンこそ、イギリスでもっとも積極的に、しかも明確に生産力を把握することができると見做されてゐたわけである。

資本主義の確立期である一九世紀初頭において、製造工業の経営者が利益をあげようとするれば、生産力の上昇に期待しなければならなかつた。したがつて、オウエンが機械の生産力を認識し、生産力上昇の手段となりうる機械を破壊する運動（ラダイト）にたいして、嫌惡の念をいだいたのは、むしろ当然であるといわなければならない。オウエンの位置とかれの思想とのかかわりあいには、こういうところに見出すことができよう。

ここで問題となるのは、オウエンがブルジョアジーの立場から生産力を把握したとしても、どうして現体制批判を行つたのかということである。当時は、産業革命の進行中であるから、製造業者、すなわち、産業資本がまさに急速に發展しつつあつたわけであるから、オウエン自身にとつても、現体制はまったく異議のない、満足すべき事態ではなかつたらうか。たしかに、オウエンは、自分の経営してゐた工場が順調に利益をあげており、そのかぎりでは満足してゐたと考えられる。しかしながら、オウエンはニュー・ラナーク工場の経営をはじめてみて、「恐るべき障害」に直面したと述懐してゐるように、生産力の担い手であるはずの労働力が十分に陶冶されていない現実をかれは知つた。だがこれを、かれは直接的に貧民労働者の責任とは考えずに、かれらの環境がそうさせていると考えた。そ

ここでオウエンは労働者をそうさせている環境¹¹現体制を批判するのである。怠惰と貧困と不道德にあまんじている人びとは、宗教などにより誤ったことを教え込まれているからであるとオウエンはいう。「人びとは怠惰と貧困とほとんどあらゆる種類の犯罪のなかで生活し、その結果、かれらの生活は、負債と不健康と悲慘にみちたものとなった。しかも事態をいっそう悪化させたのは、——もっともその原因は、主義を良心的に墨守するという最善の動機から生じたものであるが、——全体が強い宗派的影響のもとにたち、一派の宗教的意見が他のすべての宗教的意見にたいして明白かつ決定的な特権が与えられ、そしてこの好遇された意見の告白者が村の特権者となったということである」。¹⁶

こうして現体制批判の具体的な対象は、「特権を与えられている宗教」ということになる。オウエンの宗教批判は、一八一七年夏の公開集会における演説¹⁷とともに有名である。しかし、オウエンの宗教批判は、一八一七年がはじめてではない。すでに『新社会観』第三論文に明確な形であらわれている。かれは教育における影響の大きいことを指摘し、「それは教会とその教義であって、それは最高の利益と重要性をもつこと¹⁸を¹⁸含んでいる。宗教問題の真実にかんずる知識が、人間の幸福を永久的に確立するものであるかぎりはそうである」とのべている。そして、人と人との離反させているのが現実の宗教なのだ¹⁹と厳しい批判を加えている。したがって、「純粹無垢の生きた宗教¹⁹を、いかなる悪の反作用をも伴うことなく、人間に平和と幸福を与える唯一の宗教を樹立するための堅固な基礎がここにあるのである」²⁰という²⁰ことになり、現実の宗派を改組することを主張している。したがって、オウエンはけっして宗教を否定するものではなく、いくつもの宗派^{セクト}に分かれて争い合っている現状を批判しているのである。これらの宗教にたいする見解は、一八一七年の公開集会における演説と、表現こそちがいがあっても、内容的には異なるものではない。この面においても、ベアの主張とはちがって、オウエンが一八一七年に転換したとはみられない。

以上のように、正しい宗教により正しい教育が行なわれ、貧民労働者が正しい、そして好ましい性格の持ち主にされるよう、オウエンは「新学院」New Institutionを実際に建設したのである。この構想には、貧民教育を中心とするものであるが、『ラナーク州への報告』に示された共同村建設の青写真がすでに萌芽的に示されていることは注目すべきことである。いずれにせよ、オウエンの性格形成論と、それに基づく貧民教育・慈善・共同村建設は、さまざまな動機によるものとはいえ、そのなかから一つの特徴を見出すとすれば、それは、工場経営者＝ブルジョアジーとしての側面なのである。エンゲルスがオウエンを「商人的計算」^②と評した一面なのである。しかし一工場経営者が「商人的計算」によって、これほど多彩な活動（著作・講演・集会・共同村建設・教育施設）を行なうことができたろうか。もしできたとしたらその理由は、いったい何だろうか。

まず、かれはイギリス一流の綿紡績業者であった。この事実からかれの思想は、絶えず社会全体に向けられなければならないなかった。たとえば、アメリカ産の綿花のことも考えなければならなかったし、製品の販路としての外国の市場状況などについて考えなければならず、結局は国際事情にも敏感にならざるをえなかった。イギリス第一級の綿紡績工場の経営者としての思考は、社会全体、否、世界全体に広げられたのは当然である。オウエンの多彩な活動は、多感かつ俊敏なイギリス第一級のブルジョアジーとして、当然すぎるほどのものであったと考えられる。

ところで、オウエンの最大の関心事は貧民労働者の教育であったが、現実の労働力になりえない多数の貧民の存在は、救貧法の適用をうけてかれらが救済されることには大反対であった。^③それはブルジョアジーの負担になるばかりか、救済をうけている貧民が労働力として、労働市場にあらわれてくる可能性を少なくするからであった。それにもかかわらず、現状のような労働力の酷使にたいしては、「社会的総資本」ともいえるべき立場から、労働力保全にかん

して異常ともいえるほどの危機感をもっていたのである。低賃金経済を基調とする重商主義体制は、産業革命の進捗とともに、スミスにより提唱された国内市場依存の高賃金経済Ⅱ生産力上昇という体制に転換したかに見えた。しかし、機械の採用は労働者を貧困におとし入れ、ふたたび低賃金・長時間労働という極劣悪状態が出現した。このような労働力のくいづぶしにより、労働力の正常な再生産を妨げ、結局、産業革命によって確立されたはずの資本Ⅱ賃労働関係は、正常な形で存続しえないのではないかという危機意識をオウエンはもっていたのである。現状のままですすめば、怠惰で、不道徳な貧民の再生産にすぎないとオウエンには思えたのである。オウエンの性格形成論は、この悪循環をたちきるための方策であり、理念であった。かれは、これを早くも一八〇九年に新学院 *New Institution* として、ニュー・ラナークの工場で実施していたのである。この模様もふくめて、次に、一八一二年にオウエンがはじめて書いたパンフレット『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』の内容を見ていくことにする。

注

- ① *The Life of Robert Owen*, p. 135. 邦訳二四三ページ。
- ② J. Savile, op. cit., p. vi.
- ③ *Ibid.*, p. xvii, note.
- ④ *The Life of Robert Owen*, p. 64. 邦訳二二二ページ。
- ⑤ N. V. S., p. 14. 邦訳二五ページ。傍点引用者。
- ⑥ *The Mirror of Truth*, published Every Friday, October 10, 1817, p. 26. これはオウエンの最初の機関誌である。筆者が接することのできたのは、この一〇月一〇号と十一月七日号の二号分が合冊にされ、通しページがいられているものである。もしこの日付が正しく、「二か月で廃刊になった」ものであるとすれば、園乾治「ロバート・オウエン年譜」

〔ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集——ロバート・オウエン生涯二百年記念——』家の光協会、一九七一年〕二二一ページに、「これが「一月創刊」となっているのは誤りということになろう。なお「真理の鐘」とあるのは「真理の鏡」の誤植と思われる。

この「The Mirror of Truth」には全体を通じて筆者名が明記されていない。しかし、この機関誌が「オウエン氏の計画にかんして、これを大衆に提示すること」(Ibid, p. 5.)を目的としているかぎり、ここに示された内容はオウエンの思想と大きくはなれていないとは考えられない。

- ⑦ Ibid, p. 26. 「」内引用者。
- ⑧ Ibid, p. 8. この記事は“Observation on Mr. Owen's Plan”と題する欄にある。
- ⑨ V. A. C. Gatrell, op. cit., introduction, pp. 17, 20.
- ⑩ N. V. S., p. 14. 邦訳二六ページ。
- ⑪ 拙稿「イギリス重商主義とインダストリ」一九一ページ。Cf. D. H. Colman, Labour in the English Economy of the Seventeenth Century, The Economic History Review, Vol. VIII, No. 3, 1956, p. 280.
- ⑫ N. V. S., p. 14. 邦訳二六ページ。
- ⑬ Ibid, p. 7. 邦訳一六ページ。
- ⑭ Ibid, p. 8. 邦訳一七ページ。
- ⑮ Ibid, p. 8. 邦訳一八ページ。
- ⑯ Ibid, p. 27. 邦訳四七—四八ページ。
- ⑰ Address, Thursday, August 21st, 1817, delivered at the City of London Tavern at the adjourned public meeting, in A Supplementary Appendix to the First Volume of the Life of Robert Owen Vol. 1A, 1858, Reprints by Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1967, pp. 108-118. 「シティ・オブ・ロンドン・タヴァーン第二回公開集会における演説」(渡辺義晴訳『社会改革と教育』明治図書、一九六八年)九〇—一〇六ページ。
- ⑱ N. V. S., p. 50. 邦訳八五ページ。

- ① Ibid., p. 51. 邦訳八六ページ。
② Ibid., p. 57. 邦訳九四―九五ページ。
③ エンゲルス「空想から科学への社会主義の発展」(『マルクス・エンゲルス全集』大月書店、一九六八年)一九六ページ。
④ オウエンの救貧法にたいする態度とそれの根拠については、拙稿「産業革命と空想的社会主義」四一ページ参照。
⑤ Robert Dale Owen, *Threading my Way, an Autobiography*, 1874, Reprints by Augustus M. Kelley, New York, 1967, p. 101. オウエン自身の『自叙伝』には、*New Institution* を一八〇九年から始めたとは書かれていないが、こう書かれている。「わたくしは、一八〇九年青少年層の新しい性格を形づくるための幼稚園その他の学校の基礎をひらきはじめた」(*The Life of Robert Owen*, p. 85. 邦訳二五九ページ)と。これの著者ロバート・デイル・オウエンは、ロバート・オウエンの長男で、一八〇一年、かれが三〇歳のときに生まれた子供である。

四 『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』

オウエンは、『新社会観』第一論文の執筆に先だつ一八二二年、本節表題のパンフレットを書き、エディンバラのジョン・モワルというフランス人系の印刷業者によってこれが公けにされた。^①これは、オウエンの手によつてはじめて書かれ、活字にされたものである。『声明』は、「ニュー・ラナーク工場の宣伝パンフレット」であり、「労働者の状態を改善し、しかも合理的な利益をあげうる方針によるニュー・ラナーク工場の経営方法とその実際の施設の概要」^②を書いたものである。このパンフレットを書いた動機など、周囲の状況については、『自叙伝』からある程度のことを知ることができる。オウエンが「最初から五〇〇〇ポンドほどの費用がかかる」というのも、まさに『声明』に示された計画を実施に移すための費用であった。だが、「そんな小さな子供たちを学校へやることに反対だ」という親の

偏見もあれば、「合資者たちの反対にも会うことになった」^③と、かれが『自叙伝』でのべているように、これ以後一八一六年一月一日性格形成学院開院式の挙行までは、いろいろ困難な問題があった。^④

その最大のものは、合資者コリン・キャンベル（オウエンの母の実家ウィリアム家の親戚）の動きと、合資者たちの学校建設にたいする無理解とであった。オウエンはいう。「かれらは、学校を建築することに反対した。かれらはいう。自分たちは紡績業者だ、もうけのために商売をやっている実業家だ、児童教育なんかには何の関係もないはずだ、だれだって工場のなかで教育などやっているものなどありはしないさ。かれらは、反対をつづけ、またわたくしの労働者状態の改善策すべてに反対した」^⑤。結局、この工場を競売に付することになったが、その間、この工場についての悪宣伝で、オウエンは苦闘する。その悪宣伝を克服するために、自分の計画を詳細に知らせて、正しく自分の工場を評価してもらうことを目的としたのが、この『声明』である。^⑥こうして『声明』は、「貧民労働者階級改善のために、積極的に方策をはじめることを見出しに希望している人びとのあいだに配布され」^⑦、ベンサムやギブズやフォスターなどの合理主義者を新合資者として迎えることができた。

さて、『声明』の最初には、このニュー・ラナーク工場の簡単な由来についてふれてあり、かのデイビッド・デイルのことが書かれている。^⑧つづいて、自分とデイルとの関係にふれてから、自分の計画についての説明にはいる。その目的とするところは、つまり「多数の人びとにたいして、最大の安楽と改善を伴い、経営主にとっても最大の究極的利益を生み出すことである」^⑨としている。そしてこの計画は、多数の人びとに雇用を与え、多数の人びとにたいする最大の安楽と改善のために、「製造共同^{マニファクチュアリング・コミュニティ}を一つのモデル」として設定するというのである。こうして、オウエンは、「経営者の利益」、「人びとの最大の安楽」、「共同体」の問題を提起している。そして「これは、人びとの

性格形成上、若干の根本的変革がなければ、帝国を革命し、破壊してしまう危険があったし、いままなお大いにその危険がある^⑩といい、前節でみたように、『新社会観』における「もつとも悪く、もつとも危険な人物」と同じ問題の取り上げ方をここにもみることができる。ここで、オウエンのいう「共同体」にふれておきたい。かれは、「製造共同体」ということばを用いているが、これは自己の経営している工場をさしている。結局、工場は「共同体」としてとらえられ、経営者と労働者とは、ともに共同体の一員で一体であるという考え方がつらぬかれている。つまり、『ラナーク州への報告』における共同体も、結局は一つの経営体としてみることもできるのである。

さて、この計画というのは、「單純明白な原理にもとづくものであって、いかなる性格も、野蛮な人間から賢明あるいは知的な慈悲深い人間にいたるまで、それにふさわしい手段を適用することによって形成されるものである。そして、これらの手段は、社会で影響をもつ人びとの命令と支配のもとで行なわれる」^⑪。このことばは、『新社会観』第一論文の最初の部分とほとんど同一の内容のものである。このことばのすぐあとに、「この工場に集まってきた人びとは、貧困で、無知で、怠惰で、盗みをはたらき、のんだくれで、嘘つきで、すべてかれらに付随している悪徳と、これらが生み出した悲惨を強く経験している」^⑫人びとであるという。これを取り除くのが教育であるというのだが、じつは、自分の工場では、一年くらいで、これらの悪徳を矯正でき、「いまやかれらは、いちじるしく正直で、勤勉で、まじめで、秩序正しくなった」^⑬と、自己の成果を宣伝しているのである。このために、教育施設が必要になるのだが、合資者（これには具体的には氏名はあげられていない）がこの計画に反対していると、『自叙伝』とほぼ同内容のことが書かれている^⑭。それにとどまることなく、合資者の経営の無理解について批判し、「他の株式所有者たちは、いま、その工場の管理に努力しているが、かれらはその工場が形成されている原理を理解していない」^⑮という。

オウエンは合資者批判のあと、自分の実績を披瀝している。「後の経営者〔自分のことをさしている〕は、工場経営に用いられた全資本にたいして、年五パーセント以上、実額で五万ポンド以上の利益をあげた。^⑮そのうえ、二〇〇〇人以上もの人びとを、仕事もさせずに四か月間七〇〇〇ポンドの費用で維持していた。同時期に、工場の生産力を当初の五倍程度までに引き上げ、原価を年六万ポンド近く切りつめ、生産品の質を大いに改善した^⑰という。ついでかれは、製品についてのべ、その製品にたいする需要は減少することはないと説明している。^⑱このように経営が成功しているのだから、「投下資本にたいする直接的利益は、確実に一〇パーセントと予想してもよい^⑲」とのべているが、他方では、貧民労働者を、極貧の状態に放置しておくことはできないという。^⑳もちろん、これには人道主義的、博愛主義的立場からだけではなく、オウエン特有の経営的配慮がなされている。国で行なっている救貧法のもとでは、「国の慈善施設〔ワークハウス〕を出現させ」、それは「貧民の性格を低下させ、金持ちを貧困にする^㉑」。さらに、オウエンは、この『声明』の最後の部分で、この計画が実施されれば、「下層階級の破滅の原因、すなわち救貧税はなくなり、先見の明と節制〔過度の飲酒をやめること〕が広く普及し、かれらは理知によって勤勉となる^㉒」とのべている。救貧税にたいしては、当時のブルジョアジーは負担を感じていたのは事実であり、救貧税にたいするオウエンの態度は、明らかに当時のブルジョアジーを代表していた。このブルジョアジーの主張が実現されたのが一八三四年の改正救貧法であり、これにより院外救済がすべて廃止されることになった。^㉓なお、一八一七年の『真理の鏡』にも、救貧法にたいして『声明』と同じような論理が展開されている。^㉔

さて、オウエンは、「共同体^{コミュニティ}のよりいっそうの改善のためと、企業に究極的な利益を与えるために、わたくしが進めてきたこれらの計画がどんな意味をもつか、とくに説明する必要がある^㉕」とのべ、以下『声明』において、その

計画にかんする概要が説明されている。まず、この計画の意図についてこういう。「住民を増加させ、その費用を減少させ、その国内的安樂を加え、大いにその性格を改善すること」とし、これが「新學院」*New Institution*と名づけられたもので、工場を中心に囲い地をもったものであった⁽²⁶⁾と。以下、この新學院は、次のことがらを遂行することを目的としているとして、八つの事項をあげている。

第一に運動場について。二歳から五歳までの子供たちが、「その中で容易に管理され、かれらの幼い心が適切に導かれる」。これは、「下層階級のあいだにおける子供たちの氣質が徐々にだめにされていき、悪い習慣が学齢期前につけられてしまう⁽²⁷⁾」からである。他方、親たちは自分自身のためにも、工場のためにも、もっと有益に時間が費やされる⁽²⁸⁾。五歳から一〇歳の子供たちのためにも集会場が用意される。「少年には練兵場が用意され、そこで軍事訓練を行ないつつ、子供たちに「礼儀正しく、村を清潔な状態にしておくことができるような習慣を身につけさせる」という。『真理の鏡』には、「The Army」と題する欄があり、軍隊の規律をゆるめて、「親切さ」がとり入れられるべきであると書かれている。これにより、兵士の性格も変わり、「個人の楽しみと幸福が保証される⁽²⁹⁾」とある。そして、同じ趣旨のことが、H・カルバートと名のる一近衛騎兵からの手紙が、同誌に掲載されている。この構想は『ランナーク州への報告』に受けつがれ、「個人の氣質を改善し、健康と力を増大させるのに適した身体の運動は、子供たちの育成と教育の一部をなすであろう⁽³¹⁾」。これが戦時においても有用となると⁽³²⁾。

第二に大倉庫について。これについては詳細な説明がなく、ただ工場と村との双方のためにもっとも有利であると書かれているにすぎない。

第三に炊事場について。大規模な炊事場を一つ用意する。これにより、二―三のかまどと六人の従事者をおくだけ

で、何百分ものかまどと、多数の従事者の分の値いがある。これにより、工場の人びとや村人のために共同の炊事を行なう。共同炊事は、「食糧を衛生的にし、栄養分の高い材料を安く得られる」という、まさに消費における経済的合理性の追求を意図したものである。

第四に、共同食堂について。炊事場と直接つづいたところに、内部一一〇フィートと四〇フィートの広さ（約四〇〇平方メートル）の食堂を用意する。「工場に雇用されている人のなかには、ラナークの州都に住んでいる人もいて、一マイル以上もはなれたところから通勤しているものもある。かれらの食事は、そこから規則的に送られてくるが、かなりわずらわしくまた費用がかかっている」。こういう人びとのために共同食堂は大変便利なので、「やがてこの広さでは手狭になるのではないかと心配される」。さらにオウエンは、これにかんして次のような計算を行なっている。この炊事場と食堂は、「村の住民がいま食べているよりも安く、週一シリング六ペンスででき、二二〇〇人以上の分をまかなえる。これだけで、年間八五八〇ポンド節約でき、「ラナークの」新旧両市街の住民と工場経営者とのあいだで分配されることになる」と。⁽³⁵⁾ この共同炊事や共同食堂の構想は、じつにオウエンの合理的側面を見ることができ、興味深いものである。これは『ラナーク州への報告』⁽³⁶⁾においても、一八一七年三月の『貧民労働者救済委員会への報告』⁽³⁷⁾においても、平行四辺形の共同体の構想として示されている。

第五に、食堂の別途利用について。食卓を倉庫にかたづけて、その場所でダンスをさせる。これは若い人びとの健康のために役立つよう行なわれる。とくに「日の短い冬には、若者が戸外で運動することができない」ので、とくに重要なことだという。そして、「一定の仕事からこの動作「ダンス」への変化は、かれらの精神にとっても、もっとも好しいものであり、仕事への愛着の強力な源泉となる」と。⁽³⁸⁾ この構想こそ、まさに「生命ある機械」に注油することを

意味し、明らかに経営者Ⅱブルジョアジーとしての立場がそこに示されている。

第六に、一般教室と教会について。一四〇フィートと四〇フィートの広さで、高さ二〇フィートの建物を用意して、村人や工場の人びとのための教室と教会とに用いる。少年少女は、読み・書き・計算（とくに四則）を教えられる。少年には第一でみたように、練兵場で教練と作戦原理が教えられる。「自国にたいするもつとも効果的な防衛を行なうことを可能にする」ためである。⁽³⁹⁾少女には料理のしかた、衣服の縫い方などが教え込まれる。この家庭教育については、オウエンは矛盾している。第三、第四の共同炊事、共同食堂の構想では、料理をするものが数人いれば十分であった。各人は家庭ではその仕事は不要になるはずである。しかし、オウエン自身にとっては、矛盾ではなかった。現実の各家庭においては、それぞれ別個に食事の準備をしているからである。だがこれを全体的な構想として考えるかぎり、明らかに矛盾である。このオウエンの矛盾は、かれの現実主義的側面によるものであるといえる。教会として用いるばあいには、宗派を差別することなく、すべての宗派を平等に使用させるといふものである。この宗派にたいする考えは、後まではば一貫しているように思われる。

第七に、人々向けの講義について。一週のうち三晩、工場の仕事を終えてから講義を行なう。その内容は、大別して二つである。一つは、消費経済についてである。「自分で稼いだものをもつとも有利に消費する方法」が教えられる。いわば支出の極大満足を得るための限界効用均等の法則ともいふべきもので、ともかく経済的合理主義の立場がそこにみられる。他の一つは、子供の教育方法についてである。この構想は、オウエンの性格形成論Ⅱ幼児教育の必要性から当然でてくるものである。こうして、「自分の努力と、よりすぐれた行為とにより、合理性が生じ、人びとに独立性を与える」⁽⁴⁰⁾というのが、オウエンのもつとも強調したいところである。

第八に道路の改善について。ラナークの旧市街と新市街とのあいだの道路はわるく、冬期には小さな子供たちが通行することがほとんどできない状態である。このような状態では、大部分のラナークの住民を工場や村の製造目的に雇用することを妨げている。そこでこの道路を改善すれば、労働者の供給をいちじるしくふやすことができる。「一定の工員の需要にたいして二倍の供給をもたらし、その結果はもちろん、突然でしかも大幅な労働賃金の上昇にたいする永続的な抑制となる」とオウエンはのべている。この道路にかんしては、『新社会観』や『ラナーク州への報告』にはあらわれていないが、この計画には、オウエンの労働力確保にたいするなみなみならない意欲を知ることができる。オウエン自身は、たんなる一個の私的資本にすぎないが、その私的資本が公道の改善にまで投資しても、労働力を確保したいという、それほどオウエンは雇用に耐えうる質の高い労働力を欲していたのである。ここにあらわれたオウエンの姿は、たんに与えられた条件のなかで活動するという一般のブルジョアジーではなく、現実を自己の側に有利に組み入れて変革していくという、現実的・実践的・積極的なブルジョアジーとしての姿である。

注

- ① A Statement regarding the New Lanark Establishment, Edinburgh, printed by John Moir, 1812. これは、英国博物館の所蔵本(整理番号8276. ee.14.)を British Museum Photographic Service, London により、マイクロフィルム化したものによった。これには、オウエン自身の手によると思われる署名がみられる。以下本書は、'Statement または『声明』と略記する。
- ② 五島茂『前掲書』一二ページ。
- ③ The Life of Robert Owen, p. 84, 邦訳一五七ページ。
- ④ Cf. Ibid., pp. 85-88, 邦訳一五九—一六五ページ参照。

- ⑤ Ibid, p. 87. 邦訳一六三ページ。
- ⑥ 五島茂『前掲書』一二三ページ。
- ⑦ The Life of Robert Owen, p. 89. 邦訳一六六ページ。
- ⑧ Statment, p. 3.
- ⑨ Ibid, p. 4. 傍点は引用者。
- ⑩⑪ Ibid., p. 4.
- ⑫⑬ Ibid., p. 5.
- ⑭ Ibid, pp. 5-6.
- ⑮ Ibid, p. 8.
- ⑯ 投下資本にたいする五パーセント以上の利益が実額五万ポンド以上だというならば、オウエンの工場の投下資本は約一〇万ポンドということになる。一八三二年当時の第一の綿工業資本家と自称したW・R・グレグの投下資本額は、固定資本九万八〇〇〇ポンド、資金約三万四〇〇〇ポンド、流動資本七万ポンド、生産物価値一五万七〇〇〇ポンドで、合計約三六万ポンドであった（吉岡『前掲書』五八ページ）。したがってオウエンが一八〇〇年ころのニュー・ラナーク工場の状態として、同工場がいかに大きいとしても、一〇〇万ポンドというのはやや過大な数値のように思われる。
- ⑰ Statment, p. 9.
- ⑱ Ibid, pp. 10-11.
- ⑲ Ibid, p. 11.
- ⑳ オウエンは、工場経営のことを考えるとき、「投下資本の五パーセントの利益」を各所で問題にしている（頻繁に該箇所があるためこれの提示は省略する）。「五パーセントの利益」というのが、オウエンの抱いていた「適正利益率ともいうべきものである。どんなにあいでも、これだけの利益が獲得できたならば、残りの分は慈善に使用するという博愛主義的経営者のモラルともいうべきものかと解される。
- ㉑ Statment, pp. 11, 22. 「」内引用者。

- ② 田代不二男『イギリス救貧制度の発達』（光生館、一九六九年）九一一—一〇五ページ参照。
- ③ Cf. *The Mirror of Truth*, November 7, 1817, p. 41. じじじは救貧税がブルジョアジーの負担になるだけだという。
- ④ じじじは Community は、前後関係から、当然 *Statement*, p. 4 に出てくる *Manufacturing Community*（製造業共同体）のことである。オウエンは製造工場を一つの共同体と解していたことがわかる。そしてこの考え方は、一八二〇年に執筆された『ラナーク州への報告』における共同体社会の原型がすでに萌芽的に示されていると思われる。
- ⑤ *Statement*, p. 12.
- ⑥ *Ibid.*, p. 12. . . . は原文イタリック。
- ⑦ ⑧ *Ibid.*, pp. 12-13. じじじは「工場の利益となるように」親たちが訓練されることを明記されている。じじじは「きりきり」工場経営者としてのオウエンの姿がうかがい上がる。
- ⑨ *The Mirror of Truth*, Oct. 10, 1817, p. 17.
- ⑩ *Ibid.*, p. 18.
- ⑪ Robert Owen, *Report to the County of Lanark*, May 1, 1820, in *A New View of Society and Other Writings*, introduction by G. D. H. Cole, 1927, p. 291. 以下これの引用はこの版による。永井義雄・鈴木幹久訳『ラナーク州への報告』（未来社、一九七〇年）九八ページ。
- ⑫ *Ibid.*, p. 292. 邦訳九九ページ。
- ⑬ *Statement*, p. 14.
- ⑭ *Ibid.*, pp. 14-15.
- ⑮ *Ibid.*, pp. 19-20.
- ⑯ *Report to the County of Lanark*, p. 268. 邦訳五一ページ。
- ⑰ *Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor*, referred to the Committee of the House of Commons on the Poor Laws. March, 1817, in *A Supplementary Appendix to the First Volume of the Life of Robert Owen*, Vol. IA, 1858, p. 58. 渡辺義晴訳『前掲書』七六ページ。

③⑧ Statment, p. 15. 傍点は引用者。

③⑨ Ibid., p. 16.

④⑩ Ibid., p. 17.

④⑪ Ibid., p. 19.

*

*

*

以上、オウエンの最初の著作『声明』と、これとほとんど同時に書いたとみられる『新社会観』とを中心に、かれの思想とその時代背景の問題点を考察してきた。コールの指摘のように、たしかにオウエンの思想は多彩で、しかも多様性に富み、「なぞの部分」が少なくない。しかし、以上考察してきた部分は、オウエンの八七年という長い生涯のうちの一点ともいえるべきものである。これだけで、オウエンの全体像を評することは、きわめて危険であり、かつ不可能でさえある。少なくとも、一八二〇年に執筆した『ラナーク州への報告』の検討をこれに加えなければなるまい。それにもかかわらず、ここで一応の帰結を示すには理由がある。オウエンの長い生涯のうち、「一八一二年から二一年にかけて、かれはその精神的能力の最盛期であった」（マックス・ベア）と評されるからであり、また、本稿において、できるかぎり、一八一七年、一八二〇年の著作との関連性を追求してきたつもりであるからである。

さて、『声明』にあらわれたオウエンの計画は、じつにユニークなものであるが、徹底した合理主義的な側面、教育を中心とした啓蒙主義的側面、さらに道路改善のように直接的に表明されている経営者としての側面などがある。さらに共同体の主張、保守主義的側面、博愛主義的側面が加えられる。これでふたたび、オウエンはコールのいう「なぞの人間」に引きもどされてしまった。しかしながら、トーニーの指摘のように、オウエンの基本原則は、「人間

はその環境の創造物であるということであり、全住民の慣習や生活様式や道徳的価値は、かれらの生活がいとなまれている自然的・経済的・社会的条件の変化によって変えられてきたし、変えられるものだということであり^①、この基本原則からすれば、他のすべての側面はかすんでしまう。要するに、オウエンの中心思想は性格形成論であるということである。もしそうであるとすれば、一八一二—一八一三年という、オウエンの著作活動のスタートの時期に、すでにかれの中心的思想を形成したことになる。

ところで、かれの性格形成論は、結論からいえば、経営者＝ブルジョア的要求の結果として生まれたものである。その理由については、ここではくりかえさない。しかし、これは、教育中心の思想であるかぎり啓蒙主義とも結びつくし、貧民を好意的に考察したという点では博愛主義に結びついてくる。また合理主義を貫いていくのも、ブルジョアジーとしての側面でもあるわけである。

そこで、オウエンのさまざまな側面のなから、共通のものを、あるいは、その中心をさがし出すとすれば、そこには、経営者＝ブルジョアジーとしての側面ということになる。とくに『声明』および『新社会観』にはその傾向がつよく、これがさらに一八一七年および、『ラナーク州への報告』と共通のものがきわめて多いことが知られるのである。

産業革命期における生産力の急上昇は、その成果の大部分を、必然的にブルジョアジーによって刈り取られる。産業革命の主導部門が、オウエンの関係していた綿工業である。したがって、オウエンの立っていた位置が、もともと産業革命の影響を強くうけたことになる、この意味でオウエンは、もともと生産力上昇の成果を自己のものにしたわけであり、そのかぎりにおいて、かれは、もともと生産力を把握できる立場にあったのである。こうしてオウエン

の生産力把握は、他を圧し、ずば抜けてすぐれていたのである。それだからこそ、かれの目は、たえず全社会・全世界に向けられていた。現に『声明』において、「これらの施設は、……国家的観点からみて、はるかに高い重要性をなす」^②といわせることになり、むしろ、多くの経営者たちの利己主義を批判しているのである^③。

最後に本論文の後半部分（本号では未掲載）との関連でふれておきたい。それは、オウエンの農業論の『ラナーク州への報告』における意義の問題である。これにかんして、トニーがじつに示唆に富んだことをのべている。「一八一六年から一八二一年までの六年間にかれは、演説や紙上で、農業共同社会の綱領をくわしくのべた」^④。だが、この計画を「くだらないものだとしてかたづけてしまうことは誤りである」。「鉄道以前の時代においては、都市ではなく村を中心に社会改造を考えるのが自然であった。かれの綱領は、その飾りやオウエン好みの仮定的統計をはぎとれば、本質的には、農業と工業を結びつけ、生産と分配をその成員にとってもよいと考えられるように整える、今日ならば田園村落と呼んでよいようなものをたくさん建設せよという提案であった」^⑤。トニーのこの認識の是非はともかく、オウエンの農業論はけっして避けておろすことができないことはたしかである。したがって、つづいて、この問題を検討しようとするものである。

注

① R. H. Tawney, *The Radical Tradition, Twelve Essays on Politics, Education and Literature* edited by Rita Hinden, George Allen & Unwin, 1964, p. 34. 浜林正夫・鈴木亮訳『急進主義の伝統』（新評論社、一九六七年）四五ページ。

② Statement, p. 21.

③ この点については、五島茂氏の最近の研究において、一八二一年のオウエンの *Social System* が紹介されている。一八二一年の著作においても、「エゴイズム」が批判の対象とされている。五島茂「*Social System* (1821) 考——ロバート・オウエンの一稀観論文について——」（ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』家の光協会、一九七一年）七六ページ参照。

④ R. H. Tawney, *op. cit.*, p. 36. 邦訳四八ページ。

⑤ *Ibid.*, pp. 36-37. 邦訳四九ページ。

〔追記〕 本稿で使用したマイクロフィルムは、中央大学教授田村秀夫氏からお借りしたものである。龐大なオウエンの著作のなかから、本稿で取り上げたものを選択するに当たり、同大学の土方直史氏の有益な助言をいただいた。ここで、ともに感謝の意を表したい。